

第二章 軍艦

第一節 二十七、八年戰役前時代

明治十一年六月軍艦扶桑着邦スルヤ我海軍ニ始メテ水雷兵器ノ一部ヲ輸入セリ之等兵器中海軍一般兵器トシテ購入セルモノ及軍艦扶桑供用兵器ノ別アルモ過半ハ電氣器具ニ屬セリ之等ノ主要品ハ第六編第五章ニ既記セルガ如シ

明治十二年九月艦船水雷兵裝ニ關シ東海鎮守府ヨリ海軍郷宛左記申出アリ

水雷備付之儀ニ付松村大佐外一名献言へ添書

水雷術ノ儀ハ已ニ業ニ御着手ノ末今般柴山大尉へ該掛リ被仰付候ニ就テハ益御擴業可相成答ト考察罷在候際松村大佐外一名ヨリ別紙ノ通献言有之、元ヨリ可然儀ト被存候條各艦へ追々御頒備相成度此段申添候也

十二年九月二日

東海鎮守府司令長官

海軍 痢 殿

(別紙)

水雷御備付ノ儀ニ付上申

水雷術ノ儀方今各國ニ於テハ頗ル進歩漸々盛大ヲ極メ候勢ニ候ニ就テハ我艦隊ニ於テモ御備無之テハ不相成ト存候條艦隊中水雷ヲ可備艦々ニハ夫々御備付相成可然士官水兵ヲ選ミ技藝ニ從事爲致候ハバ艦隊ノ一助ニモ相成可申候右諸艦長協議ノ上開申候間御聞

取相成様致度此段献言仕候也

十二年八月二十九日

海軍大佐 伊 東 雋 吉

同 松 村 淳 藏

東海鎮守府司令長官殿

右ニ對シ同年十月「書面ノ趣聞置候事、追テ備付候儀ト可相心得事」ト指令シ當面ノ急務トシテ銳意水

雷兵器ノ購買ニ努力スル所アリタリ

當時(明治十六年頃)軍艦魚雷兵裝ニ關シ歐洲諸海軍國ニ於ケル思想ノ一般ヲ示セバ左ノ如シ(當時ノ

譯文ヨリ採ル)

魚形水雷ヲ大艦軍備ノ一部分トナスニ於テハ固ヨリ諸般ノ景況ニ由テ其ノ使用法ヲ可否スベキコト無論ナリ然レドモ假ニ水雷ヲ龍骨ノ一直線ニ發射シ得ベキ場合アリトセバ敵艦「ラム」ノ衝擊ヲ免ガレ得ベキモ或ハ水雷ノ爲ニ損害サルルコトアリ之レ艦首水雷管ノ利害ナリ又實戰上大艦互ニ抗スルニ當リ我ヨリ向進ノ位置ヲ採リ敵ノ舷側ニ近ヅクハ甚ダ稀有ニ屬シ多クハ舷側ト舷側トノ位置ヲ探ルモノナリ此ノ場合ニ於テハ舷側發射法ヲ以テ利アリトス

凡ソ艦船ノ舷側ヨリ水雷ヲ發スル時ハ艦船速力ノ緩急ニ拘ハラズ其ノ距離四百碼以内ハ何等ノ故障ダモアルコトナシ蓋シ其ノ發射法ニハ水中發射ト水上發射トニ様アリ此ノ二法中孰レガ利ニシテ何レガ不利ナルヤ左ニ對照セン

(第一)水中發射法ノ利トスル所ハ其ノ位置水面以下ニアルヲ以テ終始充分ニ保護セラレ且發射ノ時直ニ進行スルノ理アリ

(第二)水中管ノ利ハ艦船上他ノ兵裝ニ關係ナキヲ以テ自他互ニ妨害スルコトナシ然ルニ其ノ不利ノ點ヲ論セバ元來水中管ハ固定ノモノナリ故ニ其ノ方向ヲ自在ニ變轉スルヲ得ズ之ニ反シ水上發射法ノ如キハ器械(發射管ヲ云フ)ヲ望ム所ニ砲門ヲ運アコトヲ得且其ノ方位ヲ變轉セシムルコト最モ自在ナリ故ニ大ナル艦船ニシテ舷側ニ砲門ヲ有スルモノハ水中發射管及水上

發射器ノ兩器ヲ備フルヲ以テ最モ完全ナル兵裝トス

又「ターレット、シツプ」ノ如キハ齊ニ水中管ヲ備フルヲ得シムルノミ水上管ヲ裝備セバ必ズヤ大砲ノ發射ヲ妨ゲ彼此ノ不便ヲ生ズ
 次デ扶桑、金剛、比叡等ニ各水雷發射管ヲ裝備シ艦載小蒸氣艇ニ外裝水雷ヲ裝着シ尙關係諸兵器ノ供
 給ニ力メシガ明治二十年迄ニ軍艦ニ對シ水雷兵裝艦裝ヲ實施シ又ハ計畫セシ主要事項左ノ如シ

一、扶桑、金剛、比叡、高雄ニ對シ十八年ヨリ逐次左記魚雷兵裝ヲ行フ

| 艦別 | 發射種類 | 同管數 | 管徑 | 魚雷 | 記 | 事 |
|-------|----------------|-----|-----|-----------|------------------------|---|
| 扶桑 | 圓筒形 朱式水上發射管 | 二 | 十四吋 | 八四式 朱式 | 舷側水上旋回式各舷一 | |
| 金剛、比叡 | 同右 | 一 | 同 | 同 | 艦首一、外ニ各舷一計畫ノ處之ヲ 中止ス | |
| 高雄 | 同右 | 二 | 同 | 同 | 舷側水上旋回式各舷一 | |

二、其ノ他裝備計畫中ノモノ左ノ如シ

松島型三、八重山、龍田、葛城、大和、武藏(最後三隻ハ之ヲ取止ム)

(參 考)

葛城、大和、武藏三艦發射管兵裝ニ就テハ當初下甲板ニ裝備ノ計畫ナリシガ三艦共吃水意外ニ大ナリシ爲他ニ裝備位置ヲ求
 ムル必要アリ前部中甲板ハ錨鎖ニ觸ルル不具合アリ又金剛比叡ニ倣ヒ艦首ニ裝備シ五度ノ俯角ヲ與ヘントセバ後端ハ天井ニ
 觸ルルコトナルベキニ對シ備教師「ベルダン」ハ前部十二擧砲二門ヲ除去シ其ノ位置ニ裝備スベキヲ提唱セシガ該位置ハ管

高二、五米以上ニシテ朱式魚雷落射高度ノ制限ヲ越ユルコト實ニ一米ニ及ビ而カモ砲力ヲ減却スルヲ以テ結局右三艦ノ魚雷兵裝ハ之ヲ中止シ其ノ一部ヲ以テ水雷船第二震天へ裝備スルコトナレリ

明治二十年二月二十一日海軍大臣ハ左記艦船攻撃水雷定備例則竝ニ明細表ヲ制定シ横須賀鎮守府司令長官宛之ヲ實施スベキ旨訓令セリ

艦船攻撃水雷定備例則竝ニ明細表

第一條 艦船定備攻撃水雷及其ノ要具ハ別チテ左ノ六類トス而シテ各其ノ委詳ハ之ヲ別表ニ掲上ス

第一類 魚形水雷及其ノ要具

第二類 外裝水雷及其ノ要具

第三類 反裝水雷及其ノ要具

第四類 擲爆藥及其ノ要具

第五類 發砲電路及其ノ要具

第六類 探海及掃海要具

第二條 第一類ノ魚形水雷ハ艦船ノ現樣ニ從ヒ發射管一個ニ付四個又ハ三個ヲ以テ定備數トス

第三條 第二類ハ專ラ端舟外裝水雷トシ時トシテ艦材水雷トシテ之ヲ用フ

第四條 第三類ハ最大ナル容積ヲ要スルガ故ニ定備スベキ艦船ト雖其ノ現樣ニ從ヒ之ヲ分備シ或ハ除クコトアルベシ

第五條 凡ソ艦船ニハ六類皆之ヲ定備スルヲ例トス然レドモ艦船ノ現樣ニ從ヒ之ヲ減少ス而シテ三十三呎以上ノ小汽舟ヲ有スルモ

ノニハ第一類ノ要具中端舟發射艇ヲ增備ス

第六條 第一類以下六類ニ至リ要具ノ品目、數量ヲ別表ニ掲グト雖各艦船實際ノ計畫ニ臨ミ或ハ取捨増減スルコトアルベシ

第七條 第二類以下ノ水雷二種類以上ヲ備フルトキハ其ノ要具中流用シ得ルモノハ總數ヲ全備セズシテ適宜之ヲ減少スルモノトス

〔要具表ハ之ヲ略ス〕

別紙第一ハ明治二十年初頭艦政局事業定期報告ノ一部ニシテ首題ノ現状ヲ語ルモノナリ（當時水雷科ノ所掌タル電氣關係事項ヲモ併記ス）

右ノ如ク發射管ノ裝備ヲ得タルモ魚雷ノ供給之ニ伴ハズ十九年十月扶桑、高千穂、金剛ノ三艦ニ魚雷二個及附屬品ヲ同十一月浪速ニ魚雷四個及附屬品ヲ供給セル狀況ナリ因ニ先ニ軍艦浪速、高千穂ヲ英國ニ註文製圖ノ際ハ發射管ノ兵裝無カリシガ造艦進捗ノ半途之ガ裝備ヲ決シ下甲板前後部ニ水雷室ヲ特設シ各舷二門宛ノ旋回發射管ヲ裝備スルニ至リシハ實ニ當時ニ於ケル魚雷兵裝上ノ躍進的進歩ト謂フベシ但設計遅レシ爲發射管室及魚雷格納位置等戰時充分ナル保護困難ナリシハ事情止ムヲ得ザリシトコロナリ

（註）浪速、高千穂註文ニ先チ當初八千噸級甲鐵艦一隻註文ノ豫定ヲ以テ伊藤少將（篤吉）佐雙少匠司（左仲）等歐洲諸國ニ出張調査ノ結果鞏ロ英國「マルセー」型中型巡航艦ヲ可トシ十六年十二月其ノ二隻ヲ註文スルニ決セシモノナリ（英貨各二十二萬五千磅）而シテ十九年註文ノ海防艦三隻ノ發射管裝備ニ當リ水面上ノ高サ大ナル爲教師佛人「ベルタン」ノ勸獎ニ依リ初メテ加式水上艦形發射管ヲ採用シ發射術上ノ要求ニ應ズルニ至レリ所謂匙形發射管ノ魁ヲ作セルモノナリ

別紙第二ハ明治二十年制定兵器簿中主要艦ノ水雷科ニ屬スル事項ノ拔萃ニシテ當時ノ水雷兵裝現狀ノ一般ヲ語り特ニ防禦水雷兵器ノ裝備狀況ヲ明カニス

本期終末註文ノ軍艦吉野ノ水雷兵裝ハ從前ニ比シ顯著ナル進歩ヲ示シ發射管ハ朱式ナルモ保式魚雷使

用ニモ差支無カフンムル如ク加工シ尙魚雷ハ不取敢保式魚雷ヲ供用セル等帝國海軍魚雷界進歩ノ基礎ヲ築ケリ

終ニ本期間ニ於ケル防禦兵器ノ裝備狀況ハ前記セル(別紙第二)如クニシテ即チ反裝水雷、小掃海具、探海要具、擲爆藥、外裝水雷等ノ全部又ハ一部ヲ供給セシガ十九年着邦ノ浪速高千穂ニ於テ始メテ魚雷防禦網ヲ裝備セリ當時英海軍ニテハ防禦網ハ一、二等甲鐵艦ノミニ備ヘ巡航艦ニハ備付ケズ我當局ニ於テモ裝備セザル豫定ナリシガ浪速回航委員長タリシ伊東祐亨ノ獨斷決行ニ繫リ一隻分重量二〇噸代價二〇〇〇磅ナリ

別紙第一

明治十九年艦政局事業定期報告中水雷關係事項

一、電氣水雷、電氣屬具並ニ魚形水雷屬具ノ計畫ニ關スル圖案ノ調製ニ着手シ十九年中竣工シタルモノ總計五十七枚ナリ就中最モ重要ナルモノヲ掲記セバ制式卜定メタルモノニ於テハ浮漂水雷叉杆、雷輪、試驗電池等ニシテ後來製造ノ模範ト爲スガ爲ナリ改造ニ係ルモノニ於テハ葛城大和及武藏ニ艦ニ裝備スベキ水雷發射管旋回器、同水雷裝填臺、同發射門扉、扶桑艦用水雷運搬車及浪速、高千穂兩艦備付ノ水雷格納筐等ニシテ從來ノ儘ニテハ不充分ナルガ故ニ之ガ改造計畫ヲナセリ又新設ニ係ルモノニ於テハ浪速、高千穂兩艦用鏈滑車、葛城大和及武藏三艦ノ水雷庫用滑車、同水雷架臺、同水雷引揚鎖、同水雷引揚具、扶桑艦發射管繫止鏈及比叡艦電氣燈繫止鏈等ニシテ從來不便ヲ感ズルコト尠ナカラザルヲ以テ新ニ之ヲ設置スルノ計畫ヲ施シタリ以上ハ已ニ其ノ

成功ヲ告ゲタルモノナレドモ此ノ外擲爆薬用後裝拳銃、外裝水雷、安式有極繼電器、試験纏線器及獸脂小出管等ノ圖案計畫ニ着手中ナリ

二、諸艦船營へ配備スベキ水雷及其ノ要具ノ數量ヲ一定シ精密ナル水雷兵器簿ヲ整理スルハ極メテ緊要トス故ニ水雷要具ニ關スル許多ノ數量表ヲ調査セリ就中其ノ重要ナルモノハ電氣發砲、布設水雷及外裝水雷要具定數表、水雷演習ノ爲毎半年ニ消費スベキ物品數量表、諸艦船乘組水雷工手、使用器具ノ比例、水雷長乘組ノ艦船ニ裝備スベキ水雷用電氣機要具數量表、水雷庫ヨリ諸艦船ニ配備スベキ電氣水雷要具水雷數量表等ニシテ之ヲ水雷兵器簿調製ノ基礎トシ取捨削正ノ功ヲ經テ漸ク各艦兵器簿略整頓セルヲ見ルヲ得タリ

三、水雷及其ノ要具ノ取扱ニ關スル規則ヲ調製スルハ後來兵器ノ整理上ニ大ナル關係ヲ有スルヲ以テ則チ攻撃水雷定備例則、魚形水雷艦内取扱規則ヲ始メトシ魚形水雷修理規則、水雷ヲ艦船ニ交付スルノ概則五百听浮漂水雷、五百听海底水雷、安氏有極繼電器、電池、電路繼閉器其ノ他電氣屬具ノ取扱規則ノ取調ヲナセリ

四、水雷及其ノ屬具ノ保存法ヲ調査スルハ又緊要ノ件ナリト雖水雷ニ關スル諸種ノ審査ヲ始メシ以來日尙淺キヲ以テ未ダ充分ナル調査ヲ遂グル能ハズ依テ參考トシテ去ル一千八百八十四年英國海軍省ヨリ諸艦ニ布達セル水雷綿火藥ノ貯藏及保存ニ關スル條例取調ニ着手セリ

五、艦船へ水雷裝備方等ノ計畫ヲ終結セシ件々左ノ如シ

高雄 艦 魚形水雷發射管二門ヲ備へ各旋回ヲ爲サシメ其ノ他攻撃水雷ハ反裝水雷ヲ除クノ外凡テ設備ノコト

裝甲水雷船(小) 魚形水雷發射管四門ヲ備へ内二門ハ固定、二門ハ旋回トシ外裝水雷及擲爆藥ヲ備フルコト

海防艦(松島、鷹) 三隻共同計畫ニシテ發射管四門ヲ備へ内二門ハ固定ニ二門ハ甲板ノ中部兩舷へ分設シ旋回ヲナサシム其ノ他攻撃水雷ニ關スル諸種ハ凡テ裝備ノコト

第一報知艦 發射管二門何レモ旋回セシム其ノ他擲爆藥及探海奴ニ掃海ニ關スル諸器具ヲ備フルコト

第二報知艦 發射管四門其ノ二門ハ固定裝置ニシテ二門ハ旋回裝置ナリ其ノ他第一報知艦ニ同シ

水雷船 各發射管二門、固定裝置ニシテ他ハ第一報知艦ニ同シ

迅鯨艦 水雷練習艦ニ充テラレタルニ依リ發射管四門ヲ備ヘ内一門ハ固定トシ三門ヲ旋回トナサシム其ノ他攻撃及防禦水雷ハ演習用トシテ凡テ裝備スルコト

水雷船 水雷管附屬四隻ノ内二隻ハ發射櫃ヲ新設スルコト

葛城、大和、武藏三艦 舊水雷局ノ計畫ニ係ル水雷貯蓄庫ハ發射管球狀旋回裝置及發射門扉ヲ改良スルコト

浪速、高千穂二艦 英國ニ於テ諸水雷ノ裝備ヲ爲シタリト雖魚形水雷ニ至ツテハ各發射管四門ヲ備ヘタル而已ナリ依テ本邦ヘ同航後水雷格納所、同格納箱、運搬用軌道、滑車、裝填臺等ノ改造並ニ「レーサー」ノ畫度及裝氣栓ノ新設等ヲ爲

スコト

扶桑艦 水雷ニ關スル諸兵裝ハ舊水雷局ニ於テ爲シタルモノナリ右ノ内發射管繫止鏈、發射管運搬車ノ「ローラー」水雷買

用頭部格納所、號令室、水雷方位盤照準窓等ノ改造及「レーサー」ノ畫度等ヲナスコト

金剛艦 發砲電路ヲ裝設スルコト

別紙第二

明治二十年四月扶桑外四艦ノ水雷及其ノ要具定備表ヲ制定ス蓋シ後日ノ兵器簿ノ濫觴ナリ軍艦金剛定備表中主要品名ヲ左記シ參考ニ供ス(魚形水雷、外裝水雷、擲爆藥、發砲電路、探海及掃海ヨリ成ル)

| | | | | | |
|-------|---|--------|---|---------------|----|
| 發射管 | 二 | 大氣壓推砲筒 | 二 | 氣壓計 | 一〇 |
| 魚形水雷 | 六 | 同種古用 | 二 | 實用鎮部 | 六 |
| 圓材昇降杆 | 二 | 同受金 | 四 | 反裝水雷一式、外裝水雷一式 | 二四 |
| | | | | 爆發信管(一式) | 三〇 |

同用導火藥罐 一八 爆發藥附探海鐘 二〇 擲爆藥々罐 三〇

(註) 浪速、高千穂ノ發射管及魚形水雷定數左ノ如シ

發射管 四 魚形水雷 一六

別紙第二ノ二

明治二十年水雷練習艦迅鯨裝備水雷兵器概要

一、五百斤海底水雷 新二、舊二

一、五百斤浮漂水雷 新二、舊二

一、百斤電氣觸發水雷 新五、舊四

一、電路啓閉器 新二、舊二

一、擬水雷 二

一、電氣的機械水雷 一

一、其ノ他

「シンガー」水雷 一 「マクエポイ」水雷 一 「エービル」水雷 一

「シタット、メカニカル、マイン」圓彈共 五